

鬼は内!! 福は内!

ちょっと変わった豆まきの掛け声のわけは・・・



節分大祭後の豆まき (京都府綾部市梅松苑)



国祖のご再現

ご隠退から三千年（実際の三千年ではなく、ものすごく長い歳月のたとえ）の月日が流れ、ずっと陰から世の中の流れを見守っておられた国祖の神さまは、もうこれ以上ほっておいたら、世界がつぶれてしまうと思われ、再び世に出て来ることを決意されました。

明治25年、節分の夜のことでした。国祖の神さまは、「いり豆にも花が咲く時節がやってきた」と宣言され、再現されたのです。

豆まき

大本では、まことの神さまのことを「おほもとすめおほみかみ」としておまつりしています。

そして、国祖のご隠退と再現という歴史から、大本では節分を、とても大切な日とし、毎年立春の前日に「節分大祭」を執行し、祭典をしめくくる豆まきでは、「鬼は内、福は内」と発声します。

しかも投げる豆は、いり豆ではなく、「生の大豆」を使用しています。

生の大豆だと、畑にまけば芽が出て、たくさんの実をつけます。

「一粒万倍」のたとえのように、たくさん福が広がることを願っています。



皆さんは2月3日の節分といえば、何を連想されますか？
そう、「豆まき」ですね。
日本では古くから、伝統的な風習や民族文化として、節分に豆まきを行ってきました。
豆まきのとき、「鬼は外、福は内」と掛け声をかけますね。
でも全国では、ちょっと違った掛け声をかけて豆まきをしているところがあるのです。
大本もその一つで、「鬼は内、福は内」と発声しながら豆まきをします。
「えっ！ 何で、鬼が内になの？」
そう思ったあなた。
疑問にお答えしましょう。



みろく博士

大本本部

綾部・梅松苑
〒623-0036
京都府綾部市梅松苑 / TEL 0773 (42) 0187

亀岡・天恩郷
〒621-8686
京都府亀岡市天恩郷 / TEL 0771 (22) 5561

東京本部
〒110-0008
東京都台東区池之端 2-1-44 / TEL 03 (3821) 3701

大本ホームページ <http://www.oomoto.or.jp/>



<連絡先>



そもそも節分とは

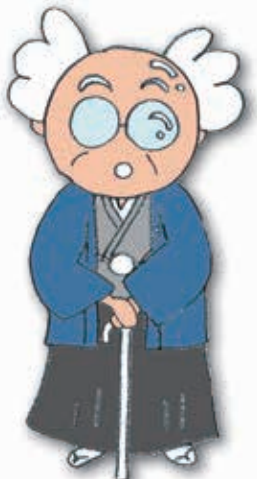
節分の「節」は、「ふし」とも読みます。竹や枝の節などといいますが、物が結合している部分のことですね。または、気候や時期や時間の変わり目や、物事のくぎり目という意味もあります。

日本のこよみでは、一年間に24節気というのがあって、春分や夏至、秋分や冬至、大寒などはよく知られていますね。

つまりそれらは季節のくぎり目をさし、それぞれの節気を分けるというところで、「節分」といいます。

その中でも特に、冬と春を大きく分ける立春の前日の節分が代表格です。

昔は、立春がお正月でしたから、節分が大みそかになりますね。



一般的な豆まき

一般的に、古来から季節の変わり目には邪気が生じると考えられてきました。

その邪気をもものけや邪鬼と考え、それが鬼になりました。

節分では鬼を退散させる魔よけの意味を込め、鬼が家の内に入って来ないように、「鬼は外」といいます。そしてたくさんの福が入って来るように「福は内」と願います。

そこから、「鬼は外、福は内」のかけ声をかけ、豆まきをするようになりました。

いろいろな掛け声

ところが、日本の各地には、「福は内、鬼は外」とは違う掛け声をかけて豆まきをする風習のところもあります。

たとえば、地名に鬼がつく神社や町では、鬼を大切にして「鬼は内、福は内」といいます。

また、「鬼はうちの神社で引き受けて、福をみなさんにあげますよ」という意味から、「鬼は内、福は外」という神社などもあります。



大本では

大本でも一般とは違って、「鬼は内、福は内」という発声で豆まきをします。

地名に鬼がつくわけでもないのですが、いったいどうしてなのか？

実は、大本では一般でいうこの節分の「鬼」をおまつりしているからなのです。

といってもその鬼は角のはえた鬼ではなく、この世を造られた「元の神さま」なのです。

簡単にいうと、「神さまの元祖の元祖」ということです。

この神さまは世界、国々の元の先祖ということから、「国祖」と呼ばれています。

人間社会にたとえると、国祖という肩書きということでしょう。

またの名前（ご神名）を国常立命へぐにとこたちのみこと」といって、日本書紀の最初に登場する神さまでもあります。

鬼と鬼門

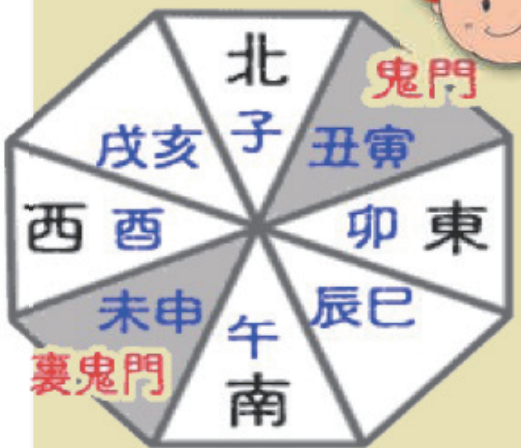
では、いったいその国祖がなぜ鬼になったのでしょうか？

太古の昔、まだ国の基がなかつたとき、この世、宇宙を造りになった国祖・国常立命さまは、この地上に「地上天国」といわれる「みるくの世」を実現しようと努力なさっていました。

いったんはとても良い世界（神代）が樹立されましたが、世の移り変わりとともに、多くの神々の中に、「われよし」「つよいものがち」のおごれる心が高まり、世が次第に乱れていったのでした。

そこで国祖は、「二度思うようにやらせてみよう」と、神々の罪を一身に背負い、節分の日に、一時、世の良（東北の方位）に隠れてしまわれました（ご退隠）。

このとき、国祖のことを「鬼」として追いやったのでした。そこから東北の方位を鬼門と呼び、不吉な方角としたのです。



以来、国祖のことを悪神、祟り神、「鬼門の金神」と呼ぶようになったのです。

調伏行事

神々は、おそろしい鬼門の金神が、二度とこの世に現れないようにといろいろな方策を考えました。それを調伏行事といえます。

その調伏行事を日本人の生活の中の伝統行事に取り入れ受け継がれてきました。

その代表的な行事が節分の豆まきです。

まことの神である国祖をご退隠に追いやった神々は、いり豆を国祖に向けて投げつけ、目つぶしとしました。そして、「もしこの炒り豆に芽が出るようになつたら帰ってきてもいいよ」といいながら、投げつけたのでした。

ほかにも、お正月の七五三（七歳、五歳、三歳）の飾りや、門松、雑煮など調伏行事はいろいろとあります。

